

杜鵑の声

宋世何

柳子弘が妻を娶ることになり、その日五里もある道程を趙生員宅まで彼の行列は行った。生きた雁の代りに（季節柄）木雁を包んだ袱紗を召使の豆伊が大事に抱え、雁夫となって新郎を引導した。雁夫の後ろには新郎を乗せた四人轎がつずき、あとには上客（賓客、彼の叔父）を乗せた馬が馬丁に附添われ、挾箱をこれまた召使の介童が担いであとに従った。至って簡素な婚行のようであるが、既に納幣、幣帛、婚需は使者をして新婦側に送ったことであり、婚行の時には大勢の新郎側の人々が同行しないしきりである。

彼の家は富裕に暮らしていた。大勢の召使、有餘の小作料、何一つ不自由なことはなかった。しかも、彼は由緒ある兩班の息子であるので、自分にその才能さえあれば、時の最高の榮譽である科擧（官吏登用試験）にも及第して官職に就くこともできる身分である。慣習的な言葉借りるならば彼は幸せに生れ羨ましく育った。

この婚姻話が持ちあがったのは、前年の秋も末頃である。金某という人が柳家を訪ねてきた。彼はS村の朴主事の友人だと名乗った。朴主事と柳大監とは昵懇の間柄である。

有りと思いますが、由緒は正しいし、その昔は官界に羽振りをきかした家柄で、いまはまた大地主で五千石に余る賭租（小作料）をととり、格式もあって、趙氏は相当な学識の持主であります。私が或る時お訪ねしましたら趙氏は、うちの娘も年頃になったから何処かへ縁付けなければならぬが、どこかによい婿は居ないものか、と相談を受けました。私は思案をめぐらし、こちら様に見当はつけたもののお互に未知の間柄ですので、自然と足が重くなり、思い余ってS村の朴主事を訪ね、それとなく意を伝えたところ、朴氏は私の意を裏打するが如く、A村の柳大監宅に神童とまでいわれているよい御令息が居るから当って見てはどうか、といわれまして躍り上がる思いがいたしました」

「朴氏も人が悪い、黙っていなさるからね」と柳氏はまた笑った。「いや、決してそのようなことではなく、自分は趙氏を知らんし、そこは事情に通じている貴兄が最適任者だと思ふから、万端お任せするとのことでした」

「尤も婚事は見合うまでは秘密にするものだそうだから……」

「御尤もです。ところで官界は何時頃お退きなさったのですか」と金氏は話題を替えた。

「もう、かれこれ七年にもなりますかなあ」と柳氏。

ここで柳氏は母家に向って婢を呼び酒肴の用意を命じた。有り合せのものであったか直ぐにお膳がはこばれ、酒杯が交されながら世間話が始まった。その世間話も大方尽きた頃、金氏はあらたまって口を切った。

「如何なものでしょうか、先程のお話について御意見だけでもお伺いしたいのですが」

「実はお話があつて参上いたしました」と金氏はいった。見たところ貧しい暮しのようではあるが、それでもござっぱりした衣服を纏い、温顔の中にも蘊蓄のあることを知らしめた。柳氏は「どうぞお上りください」と客を舍廊へ導いた。客は座敷に上ると深々と頭を下げ、二度目の挨拶をした。

「お宅の御令息様のことに関してのことなのでございますが」と切りだしてから、「近隣に著高い秀才という名声を博していることは私もかねて噂に聴いて存じております、お話は直入に申し上げますが、もう御立派に成長なさつて冠礼（元服の式）も済んだことですから、この辺で嫁御様をお迎えなさつてはと、そう存じまして足を運んだ次第でございますが」と金氏はいった。

「そんなよいお嫁になる人が居るんですか」と柳氏は笑ったが、お嫁のことは二の次で、自分の息子を娶められて満更でもなかった様子であった。

「それなんです、ここから五里ばかり離れた丁邑の在に趙生員という方が住んでおります。趙氏一族についてはお耳にしたことがお

「意見と申しまして、そう早急にはどうも……、家内とも相談せねばならぬことだし、本人の意見もあることだろうから、それよりも本人を得と御觀察なされては……何ならいま直ぐ呼びましょうか」柳氏は幾分得意のようでもあった。

「どういたしまして、それには及びません、三日ばかり前に青風塾で逢つてきました」

「それはまた手廻しのよいことを」

「甚だ申訳ないことですが、私は過客（旅人）を装い青風塾の師丈（先生）を訪ね、いろいろ学問上の疑問やその有り方について、議論もし教示も願ひ、終いには幾分なりとも詩心を分ち合つて別れましたが、その間できるだけ御令息の様子を伺つて参りました」

「それで……」

「ここで申し上げることは皆無です」

しばらく沈黙がつづいた。午後の陽差しは陰っていた。

「ではこれで失礼いたします」と客はいった。

「まあよいではありませんか、御ゆっくりなさつては、これからでは途中で夜道になりますよ」と柳氏は留めた。

「馴れている道でもありますし、夜道も平気です、御好意を有難く感謝いたします」客は、どうしても今日中に家に着かねばならぬ事情や、自分の住所を告げ、

「吉報をお待ちしております」といって立去った。

その夜、柳氏は内房で夫人と相談をした。屋間の一部始終を話し、どうしたものか、あんたの意見はどうかと糺した。

「誠に差出がましいお話ですけれど、お話によれば身分が異うような氣もいたします。勿論わたくしはあなたがその氣なら異存はござ

いません」

「身分のことがわれわれだつて遠い祖先のことについては何も知っていない。榮枯衰盛は世の慣いではないか、それに嫁は自分より身分の低いところから貰った方が婿のためには都合がよい。嫁があまり身分が高いと、婿の頭が上がらないからねえ」

「それにしても一度見てみなければなりませんねえ」

「それなんだが、正々堂々と乗り込む訳にも参るまい。見るだけ見た、断つたでは、お互の体面もあることだからねえ。ことは隠密を要することだ」

「どうしたらよいでしょうか。まさかあなたやわたくしが化けて行くわけにもゆかぬし……」

「深窓にある娘御を男の人が訪ねることはできぬことだから、そこはやっぱり女の人でなければならぬ」

「そうですね、誰か適当な人は居ないかしら、あッ、そうだ沙洞の叔母さまはどうかしら、あなた、お齡も頃合だし」

「私も最初からそうは思っていたが、何せ、汚ないなりをした行商人か何かになつて貰わねばならぬのがお気の毒でね、それで躊躇したんだよ」

「大丈夫ですよ、喜んでお引受くださると思います」

それから十日ばかり日が経ち、小間物屋の道具を揃え、村の婦から木綿の着物を借り駕籠を仕立て、召使の豆伊が沙洞の叔母のお護り役として従いてゆくことになった。一行は朝早く出立した。一行が丁邑へ入ったのはお昼を過ぎていた。恰好な場所に駕籠をおろし、彼女は目立たぬように駕籠を抜け、小間物道具を頭の上に乗せ彼等と別れて趙氏宅へ向つた。

一行がA村に戻つてきたのは大分暗くなつてからである。往復十里の道程は可成り強行軍であつた。

叔母は迎えられて母家の内房へ入つた。柳氏は座に着くと、「叔母上如何でしたか」と待ちかねたように訊いた。

「上の吉ですよ」

「それはどうも御苦勞様でございました」

「何の何の、子弘、はわが孫も同然ですよ」

「お年寄に重任を負わせたりして、申訳なくて……」

「本当に有難うございました。お疲れさまでしたでしょう」と夫人も口を添えた。

「そんな御挨拶はいいんですよ」叔母は上気嫌のようだった。

叔母は趙家に到着してからの状況を逐一語りだし、特に趙家が柳家より倍も大きく、召使の数も多いことや前庭も奥庭も広く、糧穀を蓄える倉も立派であり、建造物も豪壮で室数も多いことなど褒め、趙夫人がまた印象がよく、鷹揚のものにこだわらぬふくよかな人であるように見受けられた、と語つた。わたくしは最初から見抜かれはしないかと、内心びくびくしながら、小間物箱を広げ、これを買つてくださうとねだりました。そしたら婢達が大勢集まつてきてこれを弄つたり、あれを弄つたりしながら、これはいいわとか、これは珍しい品だとか言っているうちに、一人が、これはお嬢さまに似合うわと言いました。それまで黙つて見ていた夫人が、仕様のいい女子達ね、お嬢を呼びなさい、みんなも好きなものを一つずつ取りなさい、と言いました。目的の御息女はそつち除けで大騒ぎです。暫く経つてから婢に案内されて息女が現われ、静かに小間物箱の前に座るとじーと見詰めていましたが、これがいい、と言つて

櫛を一つ取り上げました。わたくしは二たごと三ごと、とりとめない話をしましたら素直に答えてくれます。容姿と謂い声と謂い振舞と謂い申分なく思いました。ただ一寸気になったのは、美しい顔にも拘らず愁いの陰りがあつたことです。気のせいだったのでしょうかねえ、といった。

「その陰りというのは何ですか」

「ほらよくあるじゃありませんか、人に羨やましがられて暮していても、何となしに明るくない顔があるでしょう、あれですよ」

「人相見の領域ですよ、それは……ハ、ハ、ハ」

「人間誰しも欠点はあるものですよ、よくなるのも悪くなるのもその人の心がけ一つ」

ここで夜も遅くなつたので、「今日はどうも遠路を申訳ありませんでした」と夫妻は声を揃えてお礼をいった。叔母は沙洞まで帰るというので介童に送らせた。帰りしなに「良縁だと思えますよ、わたくしは」と叔母は念を押した。

その夜、柳氏夫妻は結論をださなかつた。二、三日後柳氏は書簡を認めて使いの者をやり、S村の朴主事を招いた。事の経過を詳細に説明し、趙氏のこと、親類縁者のこと、息女のこと、家庭のことなどをもう一度探査することを依頼した。決して急いではならぬことなども付け加えた。朴氏は心よく承諾し、二、三日逗留して帰つて行つた。

正月も間近くなつた或る日朴氏は柳家を訪ねてきた。その報告によれば、趙氏個人に関しては何もいうことはなく、学もある人格者で昔のことは知らないが、いまは傍女を隠し持っている形跡もない。至って家庭的にも円満である。夫人は身分高い人で、叔母上への

見立てに狂いはない。家庭には一男一女があり、息女の下に令息があつて、その令息が人々の噂ではあまり学問的なことが得手でないという話である。親類縁者は概して少ないとはいえないが、近親者に恵まれていない。だから息女は深窓の中で、世間のことは何も知らず、婢達に囲まれて育っている。愁いある顔というのは、そんなところからきているのかも知れない、というようなことであつた。舎廊の居間で、それをきいていた柳氏も夫人も満足のようであつた。

年が明けて柳氏は豆伊を呼び、書面を丁邑の金氏へ伝達した。金氏は翌々日早速柳家を訪ねてきた。柳氏は金氏の意見を糺し、趙家へ請婚（婚姻の申込）した。日を置いて両家の婚姻が纏まり、新郎家は新婦家へ四柱を送つた。これは古礼では問名と謂い、新婦の母親が、新郎となる人の氏名と生年月日を問い、新婦となる人の吉凶を判断する節次である。納采の次に行う第二の礼ではあるが、近代に到り納采と四柱を合せて同時に行い、納采之儀には問名の礼が含まれていることになる。

この物語りは、李朝も中期から以後へかけてのことであるが、当時の両班階級間に於てはこの節次が守られていたようである。即ち古礼で婚有六礼と謂う納采、問名、納吉、納徴、請期、親迎等につながるものである。

四星状を受けた新婦家では婚姻の日字を扱ひ、新郎家へ伝えなければならぬ。古礼の納吉というもので、慣習によれば納吉書と消吉書を送り、新郎家ではそれに対する可否を納吉復書で回答することになる。

このようにして婚姻式即大礼の順序となるが、新郎側は新婦側へ

婚需を入れた函を送り、許婚の好意を謝する贈答儀礼をなす。これが納幣である。古礼では納徴といった。函の中味は幣帛と婚書である。

幣帛と納幣書を函に入れて、使者をして新婦家に届けるのだが、元來納幣は親迎即ち大札に先立って行われるものである。新婦家では婚需父が到着する時に合せて受ける準備を整え、新婦の父が親戚の中の寿福者がそれを受け、新婦の室に運ぶのである。新婦家では婚需父（函布衣）に餅や酒盤を振舞って歓待し、路銀までも与える。大層と間尺に会う役割だ。

このような節次を踏んでいよいよ大札の日を迎える。これが結婚式典であって古礼では親迎といった。昔々は新郎が新婦の家に行き、奠雁礼だけを済まして、新婦を迎えて自家に帰り、醮礼を行ったが、この時は新婦の家で奠雁、醮礼の一切の成婚式を挙げてから于帰することになっていた。その昔だと醮礼後、数ヶ月または数年間を新婦の家で暮してから于帰する例もあったが、柳家の事情はそれを許さなかった。

柳子弘の一行は丁巳の在にさしかかった。とある酒幕（旅人宿を兼ねた居酒屋）に足を留め、上客の指図で休息することになった。奠雁の礼が済み酒饌の振舞があるまでは相当な時間がかかることだし、それまで腹を減らしてはとの、召使達へのねぎらいもあり、もう一つは、趙家の迎接使を休息しながら待つという叔父の腹心でもあった。

本来ならば柳大監直々にお出ましになってもよいのだが、一人息子のこととはいえ、そこは子弘を信じ、従弟とて粗相があるとは考えられず、柳家の面目を損う杞憂もないことだから、古礼に明るい

沙洞の従弟に随行の上客の役目を与えたのである。

子弘は轎から降り、畝々と続く畑の畔を行き放尿をした。春は麗らかに霞むが如く、酒幕や民家の垣根には連翹がいまを盛りに黄色く咲いていた。この国の春は連翹から始まると謂われている。桃の木が豊かな蕾を持ち、肉感的な腰みを誇示していた。あちこちと木瓜の花が草をかぶって可愛らしい姿を見せている。山裾には松林に混って雛木の新芽が萌え始め、麦畑から飛び立った雲雀が空高く鳴り、名も知らぬ小鳥達がチツ、チツと鳴きながら上空を飛んで行った。長閑な風景である。子弘は緊張の疲れのせいか、遠い道程を轎に揺られたせいか体が怠く、眠気がさしてそのまま寝転んで春眠を貪りたかった。

果して、趙生員は近親者二、三名を引き連れ、燭籠をさげて仲人の金氏も同伴で迎接にやってきた。趙生員自身のお出迎えは柳家に対する敬意の現われであろう。金氏の司配でこの初対面は滞りなく会釈が済んだ。趙氏一同は柳家一行に附添い、子弘は新婦家に到着した。

一行は門前で轎から降り、馬から降り、皆暫く舎処（待合所）で待期した。やがて趙氏の従兄が礼服を纏い接待者として現われ、門の外の舎処まで出て一行を迎え入れた。

新郎は紗帽冠帯、官服、墨靴の出立で盛服し、奉雁者が進雁する木雁を受取り、接待者の一寸後ろから従った。上客も奉雁者も後から続いた。接待者は笏をとり、上体を前に屈して揖をしながら新郎を案内した。新郎は木雁の頭が東に向うように持ち、奠雁礼式場に入り北に向って正座し、奉雁者の指図に従い彼は木雁を小盤の上に置き腰を曲げて立ち、少し後ずさりして再拝した。式場は新婦の部

屋の戸の前庭に庭を敷きその上に花席がしつらえてあって、背の低い屏風を立て日覆の天幕が張ってあった。醮礼床（盤）の前に奠雁床（小盤）が置いてあり、いま先木雁を置いたのはその奠雁床である。柳、趙家の一統は勿論、召使を初め知らない他人まで大勢背のびまでして新郎の挙動を見守っていた。彼はそれを意識すると急に気恥かしくもあり膝の力が抜けるような気もした。一応奠雁礼は畢り、待者は木雁を新婦の部屋に迎え入れた。これで奠雁礼は畢ったのである。待者の案内で彼は内房に、上客（彼の叔父）は下処房（上客が泊る座敷）に案内されその夜はそこに泊ることになった。

慣わしによれば奠雁礼と醮礼は同日に行うのであるが、両家の距離が遠く、どうしても同日は無理なことがわかっていたので、両家の納得の上で予めそのように決められてあった。というのは形式上の問題で、一旦新婦家に到着した以上奠雁礼だけは済まさない、ひと晩でも厄介にはなれないし、また主な理由として、午後の陽差しの傾いた頃に醮礼を挙げることを忌み嫌う慣習からであった。醮礼が済み初夜を経ると上客は柳家に帰り、日を置いて新郎は于帰（新郎が新婦をつれ帰ること）する手筈になっていた。

子弘は与えられた部屋に入り、暫くじつと坐っていると、年若い侍女が「どうぞお召換えを」といって入ってきた。老女に手伝って貰って着換えが終ると、ほっと落ちつきを取戻した。早目の夕飯が終り寢床に入るまで、用もないのに女共が「何か御用はありませんか」とか「水差のお水取替えてきましようか」とかいって入れ替り立ち替り覗きに来るのには閉口した。うるさくもあったが、一方くすぐったくもあった。彼女達にはその新郎の存在が非常な関心の的だったのであらうと思われる。ただ一つ彼の心の中にそわそわし

さを感じるのには、新婦の父母や妻堂親族に正式に対面できなかったことである。現代では醮礼の後で対面するのは構わないことになっているが、古礼では初夜を経ねば新婦は父母に拝礼ができず、新郎もまたそうであった。御対面は明後日までお預けということになる。彼はその夜よく眠れなかった。

翌る醮礼の日も朝からよく晴れていた。人々は忙しそうに働いていた。門や外を問わず人が溢れ、趙家の親族や村人や通りかかりの一宿一飯の客や乞食に至るまでワイワイガヤガヤと喧噪を極めた。召使達はその整理に大わらわであった。

お昼のひと時前に、子弘は老女の世話を借りて昨日の出立で礼装をし、待者の案内で式場へ向い東側の席に入った。これから交拜礼を挙げる訳だが、新郎新婦は始めて対面することとなる。式場は中庭に東西に設席され、屏風を南北に立て交拜床（盤）は真中に置かれ、対の燭台には火が灯され、松竹の花瓶の一对と白米二皿と鶏一对を南北に分けて置いてあった。鍮器の洗面具が二つ準備されてその中に手拭を敷き、その上に水差が置いてある。醮礼床（交拜）の陳設は場所の都合によってまたは地方によって異っているようである。だからそのどちらでもよいことになっていた。日除けの大きな天幕が張られ、柳家、趙家、その親族一同はそれぞれ所定の席に居列んだ。村人や召使達は自分の持場も忘れて天幕の周囲を取り巻き、無遠慮にもあちでこそそこそ、こちでこそそこそと囁いていた。

新婦は二人の侍女に導かれて静々と白布の敷物を踏んで入場すると、新郎は揖をしながら新婦は活衣、円衫、冠（婦人の礼装時の）を被り、顔には臙脂を、脛には香料入りの頭髮油が塗ってあった。囁

脂は醜さを隠し、臉の頭髮油は、目を開けようものなら油が眼球に滲みて痛く、これは新婦の心を落ちつかせ、終始しても物を見せない魂胆からであろうとも思われる。

対盤（新婦新婦の世話役）の指図によって侍女に付添われた新婦は新郎に向つて再拝した。新郎はこれに答えて一拝する。新婦は再び再拝すると新郎は一拝して再び答えた。それが終ると新郎は新婦に向つて掛をしながら各々正座した。そして新郎は洗面器を南側に捧げ手を拭い、新婦は北側に手を拭う。新郎新婦は各々手拭で手を拭った。引続いて盃盃となり、侍者は酒床（簾）を捧げ各々の酒盃に酒を注ぐと、新郎は掛をして各々が酒盃を持ち地に注ぐ。肴は持つだけで膳の上に置き、侍者はまた酒を各々に注ぐと新郎は掛をしてから各々が酒を飲む。この時祭酒も肴も用いないことになっている。再び盃盃（簾）を新婦新婦の前に捧げて侍者は各々に酒を注ぎ盃を交換するが、新郎盃は上に、新婦盃は下に交換され各々が飲むのである。これで礼畢……儀礼は終った。新郎は新郎の部屋に、新婦は新婦の部屋に、客は所定の座敷に案内され、内庭と外庭には筵が敷かれ、それから酒宴が始まるのである。乞食は乞食の待遇で、村人と旅人は庭の席を占領し、或る過客（旅人）は筵の席を不満とし、多少の蘊蓄を笠に着、招かざる客として座敷に侵入することもある。

このような当時の結婚式は、朱子の礼に則ったもので李期から始まった慣習である。于帰してからもういろいろ面倒な礼法が残っているが、この物語は儀礼に関してはこれで終るのである。

子弘は部屋に帰ると老女が彼の盛装を脱がせた。やがて大盤が運ばれ、見るだけでも気が顛倒しそうな盛り沢山の料理であった。老

それを隠す如く屏風を繞らし、明々と幾つもの燭台には蠟燭が灯され、屏風の陰には便器までも用意されてあった。

衣擦れの音がして縁側を静々と歩いて来る氣配がする。静かに母家に連なる新婦の戸が開いて、侍女に伴われた花嫁の御入来であった。花嫁と侍女はそれぞれの席に着くと、どちらともいわず軽く頭を下げて挨拶をした。花嫁は頭を下げたまま、侍女は頭を下げて花嫁の様子を觀察するようであった。しかし長居は無用とばかり「どうぞ御ゆっくり」といつて忽々に立去った。どうぞ御ゆっくり、とは煮て食うと焼いて食うと貴男様の獲物ですからよろしく御処置願います、とも聞える言葉であった。

彼は花嫁の姿をしげしげと眺めた。頭を上げようともせず、化粧こそ落してはいるが屋間の礼装その儘である。身動き一つせずただ下を向いているので取付く島もない。彼はこの婚礼の幾日前に家の老婢に、初夜の新婦の礼装は新郎が脱がせるものですよ、といわれたことを思い出したが、初めて逢う女にそんな行為が出来る勇氣もなかったし、てれくさくもなかった。俯向いてばかりいるので、燭台の灯は明々と点っているが、顔の輪郭もはっきりわからない。大分時間も経ったが男女は一言も喋らなかつた。どうしたらよいものかと、彼は思いあぐんだが一瞬の打開の言葉もなく、胸の高鳴りばかりが波打った。その波打つ胸の高鳴りは心の臓の鼓動である。心臓の鼓動は燃える焚火の如く全身を滾るが、それも永くは続かない。焦燥と疲労は心身を勃起させたり萎ませたりして、あとは虚脱だけが残るだけだ。何かの切掛さえあれば「もう寝ましましょうか」といえばそれまでの話だが、容易にその機会もなかった。そればかりではない、裏戸の障子紙を女共は、指先に唾をつけて破り、中を

女はうるさい程気をきかせて話をしかけたり「お酒は如何でございますか」といっては酒を注いだりしたが、彼はいい加減満腹を覚える箸をおいた。老女は引きあげて行き、暫らく経ってから大盤は下げられたが、残りものは大方奥で働く女共の御馳走と代ることであろう。夕陽が沈む頃になって彼は戸を開けて縁側に立ち、春の濃い空気を胸一杯吸った。微風は彼の頬を心よく撫でた。彼はそうと抜けたしてその辺を散策しても見たかったが抜け出す途がない。酒宴はまだ騒々しく続いていた。彼はままと、部屋に戻りごろつと仰向けにひっくり返った。退屈な時間であった。

夕食が済んで半時も経ったか、「御免ください」といって若い男が部屋に入ってきた。察するところ十五、六歳にしか見えない。礼拝をしてから「姉兄、私貞植と申します。どうぞよろしく」といった。義弟である。話し振りに何かときこなく、こんなことは得手ではありませんというような顔であった。子弘に対する挨拶だって誰かに教えて貰い、それを鵜呑みしている節々が考えられる。子弘は別に話題もなかったが、無聊でもあったから親身を押付け、書堂（私塾）のことや勉学のことなど「三質問したが、彼は満足な返事をしなかった。しなかったのではなく、できなかったのが本当かも知れない。彼は終始そわそわし、早く自分の役目が終ればよいが、という素振であった。縁に話もしないうちに彼は「姉兄、御案内いたします」といつて起上り子弘を催促した。子弘は彼の後ろに従って行き新婦に案内された。新婦には誰も居なかつた。子弘と貞植は新婦に入って坐るやいなや、貞植は子弘に頭を下げて「どうぞ御ゆっくり」といつてやれやれといった顔でそそくさと部屋を出て行った。部屋は可成り広く、簞笥その他の調度品が一杯飾ってあり、

覗いている様子さえ感じられる。彼はいらいらする感情を鎮めることができなかった。屏風の裏には布団が堆高く積まれているが、それを誰が敷くのか、自分達で敷くのか、女共が見兼ねて敷いてくれるか、女の礼装を脱がす勇氣もなかった彼には何もそれについてはわからなかつた。燭台の灯だけが明々と燃え続けている。

彼は尿意を催した。便器は室内に用意してあったが、外の夜露に濡れた空気を胸一杯吸い込みたかつた。そうすれば女と一緒に寝る勇氣も出るかも知れない。彼はやおら立ち上り、表側の戸を開け片足を履物にかけ二の足を突掛けて歩き出そうとした途端、後ろから声があり「どちらへお出ですか、便器なら部屋にあるものを」と謂いながら周衣（長い上着）の裾を掴んだ。彼には確かにそう聴えた。永い時間を何一つ口をきいたことのない彼女が、これはまた何としたことだろう。何と痴れがましいことであらうか。彼の皮膚は栗立ち忿怒に逆上した。怪しからん女である。ふしだらな女である。彼は最大の侮辱を感じた。彼は後も見ずに力一杯腕で裾を振り払った。裾は簡単に解けた。そしてあたふたと塀のところまで歩き、そこに立ち止って、さて、どうしたものかと思案した。新婦に帰る気は毛頭なくなっていた。尿意はとうに消え失せている。

子弘は塀伝いに中門を出た。夜も大分遅くなったせい以前庭は跡形もなく片付いていたが、それでも所々に燭籠だけは燃えていた。舎廊（客間）では若干話声が聞えてくるが、大方大任を果した彼等の満足感の現われでもあらうか。行廊房（下男兼旅人の泊る部屋）も到つて静かである。酔い潰れて軒をかいて寝ている奴もいるだろう。彼は行廊房に近づいた。そして部屋々々を覗いた。亘伊を探がしたのである。亘伊は未だ寝てはいなかつた。静かに戸を開け合図

をしたら戸の外へ出て来た。

「どうなさいました、若旦那様」とあわてて糺した。婚礼を終った今夜から書房任（若旦那）と子弘を称んだ。いままでは道令任（お坊っちゃま）と称んだ筈である。柳家の召使で亘伊と介童は、柳大監が官職にあった時から召使つていたが、官職を退くと同時に二人を引取って召使として使つていた。亘伊は利発で気転が利き、子弘の父の在職中は中人（技術的職業に従事した階級）として使われ、あらゆる節房にかけては田舎兩班の及ぶところではなかった利巧者である。介童は亘伊に較べ頭の回転は悪かったが力が強く、父の在職在野中を問わず専ら護衛役を務めていた。

子弘は亘伊を手招きして大門の外へ出た。外は暗かったが人目のつかぬところまで誘き寄せ、事の次第を立話で語った。亘伊は狼狽の姿をありありと見せ「困ったことになりましたね」といった。

「わしはいまから家へ帰るぞ」

「そんな無茶な……」

「何が無茶だ、わしは絶対に新房には帰らぬ覚悟だ。あんな嫁は貰いたくない」

「事の重大なことは御存じでしょうね」

「その位のこと知らんで堪るか」

「一人を殺すようなことになりましたよ、若旦那」

「何も暇をつけた訳でもあるまいし、その気にさえなればお嫁でも何でも行けるではないか」

「それがそうはゆかんのですよ、女は完全に瑕物ですよ、お嫁にはもう行かない。貧乏な家庭の常民なら、婚期が過ぎてから後妻にでも収まる手もありますが、趙家のような格式ある御家庭ではそれ

は恕されないことなのですよ」と幾分泣声のようにも聴えた。

「わしはわしの生涯に関することだ、そんなこと構つてはいられない」

「それはそうですけれど……困った話になりましたね」と亘伊は当惑した。

「わしは叔父に会わずに帰るから、お前からその旨伝えてくれ」

「それではよろしく頼んだぞ」といって立去ろうとしたら、亘伊は慌てて、

「一寸待つて下さい、若旦那。この夜更けに一人歩きは物騒ですよ、介童に馬を引かせます」

「大丈夫だよ、案ずることはない」

「案ずることはないとおっしゃるが、これは私の役目ですからお聴き別けてください。こちらへ参る途中で休んだことのある酒幕の近辺で待つていてください、介童を直ぐやりましますから」

果して介童が馬を引いてやつて来た。家に辿りついたは明け方の未明の時分であった。

亘伊は落ちつかなかった。居ても立ってもいられない焦燥を感じた。事ここに至れば成るようにしか成らない。自分の才覚でどうにもなることもない。野となろうと山となろうと、どうでもなれと一人ごちた。いまず若旦那（叔父）に報告をすれば、追手を差向けて連れ戻す恐れはある。ここは一番時間を稼がねばならない。亘伊は子弘達が遠退いた時を見計って、旦那の泊っている下処房の外に立ち「旦那様亘伊でございます、お寝になりましたか」と声をかけた。部屋は未だ明りがついていて寝ている様子ではなく「いま頃何の用かな」との返事である。亘伊は声を低めて「内密なお話でお

伺いました」といった。旦那は戸を開けて外を覗いた。しばらく

亘伊の姿を見詰めていたが、様子が怪かしいと感じたか「こちらへ入れ」といった。亘伊は中に入り戸を閉めてひそひそと出来事を逐一語った。柳旦那の顔は見る見る紅潮し、心なしか手足がぶるぶる震えるようであった。しばらくは口も利けない面持である。これは大変なことになったぞと柳旦那は心の中で思った。最前までは母家の騒々しさも気にしなかったが、いまとなつては何か事が起つたに違いないことが想像された。覗きに行つた女共の知らせにより、新郎が消えてしまつてゐることがわかつて、大騒ぎしてゐるのに相違ない。これでは滅茶々々だ。これをどんな風に収拾したらよいものやら、柳旦那も亘伊同様旨い智恵が浮ぶ道理もない。柳旦那は起上る気力さえ失つて、べたんと粧板の上に坐つたままだった。彼は朝までまんじりとしなかった。

朝も早く柳旦那は趙氏を部屋に訪ねた。一部始終を申訳なく語り、事の是非は調べて見なければならぬことだが、いまそのような詮議をしたとて仕方がない、先ずは本人たる新郎が居ないのだから、どうにもならぬことである。彼は趙氏に不徳の致すところを詫び、善処することを約した。趙氏は趙氏で昨夜娘に何事なのだと、糺しても娘はただ泣くばかりで何も糺明できなかったと謂い、母親が聞いても同じことであつたと語つた。

柳旦那一行は朝食もそこそこに趙家を去つて行つた。彼等一行が柳家に着いた時にはもう既に大騒ぎであつた。沙洞の大叔父や叔母は勿論のこと、主だった親戚達が集つて鳩首凝議していた。子弘に事の経過を訊いても彼は確信をもつて答えるので、彼等はそれ以上の追求もできず、それなれば非は女側にあるのだから、怪しからん

という結論に達したのである。だが後に残る問題は柳家の体面と面目である。結婚初夜にこのような事態が起きたことによつて受けた衝撃は、女の方が大きかつた筈なのに、彼等はそれには何も触れなかった。体面がどうかといつていた人も居たが、今更どうにもなることではなく、嫁を迎え入れるか破婚するか前途はかない。ところが本人の子弘が絶対に嫌だというのだから、これは止むを得ぬ破局である。その後趙家との紆余曲折はあつたが、お互に感情問題にまで発展して結局破婚ということになった。この時子弘は十七才、嫁さんは十八才であつた。

その歳が明けてはとばかりが冷めてから、子弘は漢陽（ソウル）にやらされた。勉学と科擧を受けるためである。科擧を受けるにしても田舎からひよつこり出て来ただけでは当然合格する見込はなかつたのである。何故ならば当時兩班（権力）階級の中央に於ける派閥や党派争いは目に余るものがあり、勢道（政治上の権勢）によつて総てが支配されてゐたからである。如何に有能であつても後ろ立てがなければ出世は覚束かなかった。子弘の父柳大監は在職中は正二品以上の位を持ち、大勢の知人や部下を持つてゐた。その点子弘は恵まれていて政界の知遇を受けることが容易であつた。彼は科擧に順調に合格し、或る隠退高官の息女と結婚した。そして猛烈な派閥運動を展開して地方の要職を獲得赴任し、無事にその職を勉め、地方ばかりを転々とした。時が経つにつれて彼の父も隠退高官たる彼の岳父も中央政界から勢力を失つてゐた。在職幾有年にもなろうというのに、中央からは何の沙汰もない。もうい加減に政治が嫌になつたが、彼の父在世中は自から辞める訳にもゆかず我慢していたら、突然柳大監が亡くなつたのである。彼はそれを潮に仕来

りの如く職を辞してA村へ戻って来た。

子弘は未だ五十にも届かぬ若きだったが、彼には三男がある。二男三男は結婚して分家させて近在に住ませ、長男は相続者として家のことを見て貰い、一女一男を儲けて彼には孫ができた。魯伊や介童はもう齢老いて使いものにはならぬが、家族と一緒に結構楽しくやっている。彼は妻に何の不服もなく、寧ろ賢夫人として尊敬してもいるのである。彼は不労所得による裕福な生活に満足をし、何の不思議も感じなかった。彼が子供達を官界に送ろうとしないのは、政界の腐敗や汚濁を知っているから、せめて子供達だけでも高邁に思う心算からなのかも知れない。子供達には小さい時から勉強をさせ今でもそれを続けさせているのがそれであった。学問することには生甲斐を感じさせる希望なのである。

或る秋の日の昼下りであった。子弘は書齋に籠り書籍を繕っていたが、妙に体がものうい感じがしたので、本を覆せて縁側に出て藤椅子に寝そべった。秋の陽は遠慮なく彼の体を透す如く照りそそいだ。体の節々が弛むように心地よい。遠い昔の子供の時に野辺に遊んだことも想い出された。いまを盛りに野菊が一杯咲いていることだろう。そこに野菊がある。花の香りに胸を脹らませながら、野蕪をしたらどんなに気持がよいだろうか、とも思った。照りつける陽差しの気持よさに、そこを去るのが勿体なさに彼は道袍（ぎやうぼう）（平常着の礼服）の袖を頭の上に載せ、それとなく物想いに耽った。

ああ、あれからもう三十年にもなる。あの女はどうしているのだろうか。併せて暮しているのかしら。趙家はどうなっているのだろうか。考えて見れば惨い話でもある。しかし若気の至りとはいえ、あの時は自分のやったことが間違っていないかと今も考えている

が、あの時あんな事態が発生してから、女がまともに結婚ができて併せになれるとは考えられない。して見ると、惻隱の情が迸る思いであった。無駄なことではあるが、一度近在を訪ねて消息だけでも知って置きたかった。わしは娘を持たなくて幸いであった。破婚となったあの時、娘の親達の心情はどんなであったろうか。その親達の心情がわかるような気がする。自分がいま子の親として、また分別もできていて、そのような目に会ったらどうだとか。彼は目頭が熱くなってくるのを覚えた。彼は藤椅子から動こうともせず、青い空を眺めて黙念としていた。彼は疲れていたのかも知れないし、体に熱があるのかも知れなかった。彼は暫く目を閉じていたが、やがて居眠りを始めた。

子弘は趙家に向って路を歩いていた。誰も伴わず彼は一人であった。趙家の近辺を探ろうと思い、その昔婚行の時に休んだことのあつた。趙家は相変わらず昔の如く見覚えのある佇いそのままである。誰も子弘を知る者はいない様子であった。働く酒母（酒を売る女）だつて彼を知ってはいない筈である。子弘だって同じことだ。あの時子弘が酒幕に入つた覚えはない。だから当然彼の顔を知っている者はいないと信じた。

子弘は葉罐の酒を飲み干し、酒母を呼んで夕食を頼んだ。夕膳を運んできた酒母に向って、

「この近在に趙生員という方が住んでいる筈だが」と訊いた。

「ええ、趙生員様なら遠くはないところに住んでおいでなさるだ」と酒母は答える。

「その趙生員は今どうして暮して居なさるのかね」

「お客様は趙生員様を御存じで？」

「いやそういう訳でもないが……一寸昔お噂を聞いたことがあるのじ」

「趙生員様は昔とちつとも変らず豪勢にやっっているさだよ」と女は答えた。

酒母の答えは、子弘にとって大変興味深い話であった。内心はつと、嬉しくもある話である。よし、それなら趙家の外部だけでも覗いて見ようと腹の底で決めた。外が暗くなるのを待って、あの時の酒母なら大分齢老いた筈なのにそうでもない、多分代が変わったのかも知れないと思いつつ、昔辿った路を迷うことなく彼は真直ぐ趙家へ向つた。趙家に着いてから大門のところまで来た時、舎廊の前庭は皓々と燭籠が灯っていて、大門は開けっぱなしである。舎廊にも明りが灯っていて気のせいかな人声も聞えるようである。おかしいことである。婚礼でもあるのかな、と彼は思った。人々は忙がしうに行ったり来たりして働いている。子弘は旅人を装って大門を入り、婚事なのかと、一人に訊き二人に訊いても、誰も返事をしてくれなかった。彼は疑問が湧いてきたが、反面若しかしたら、義弟の貞植の息女が婿でも貰ったのかも知れない。それにしても少し異様である。誰も咎もうとしないことを幸いに、彼は中門から母家を覗いた。同じことである。内外を問わず人々の動きは烈しいが、奇妙な静けさが漲ぎっていた。彼は中門を入り、人に見咎められないように、初夜の新房を探し求めた。新房には相も変らず燭台の灯が明と窓を照らしていた。いまから三十年前の初夜を迎えた趙家の情況と何一つ変ってはいなかった。彼は或る予感が頭の中に関めいた。

恐怖が彼を襲ったが、事ここに至っては後退りはできない。もう既に遅過ぎた。子弘は魅せられたように新房に進み寄つた。

新房の中は鬼気が迫る程寂寥である。しかし誰かが中に居ることは間違いない。彼は中に向かつて声をかけることはできなかったが、勇を鼓して事態を見究めなければならぬと思った。彼は初夜に女共に覗かれように指に唾をつけて障子にぞうと穴を開けた。新房の外は暗かったので、部屋の光で外の気配を悟られる心配はないと一人合点し、片眼を障子穴に当てて中を覗いた。女は部屋に坐っていて、あの時と同じく俯向いて、あの時と同じく礼装の儘である。身じろき一つせず三十年前の初夜の晩と何も変わっていない。まさしく彼女は彼の妻であった。正面の燭台の灯りで顔の輪郭が照らだされて、凄惨な程美しかった。瞬間、被っている冠が角に見え、口は耳のところまで裂けて鬼女を思わせた。彼は吃驚仰天し慌てて眼を擦った。不思議と幻覚が去り、再び覗いた時はもう鬼女は居なくなり、貴やかな姿と美しい顔がそこにあった。彼は愕然とし、これは何かがある、何かの経緯があることに気がついた。警愕と恐怖が重なり合って、体がぶるぶる震え心臓がどきんと奈落の底に落ち込むような気がした。

子弘は膝頭に力を失って、戸の外にべたんと膝をつき無意識のうちに、

「お恕しく下さい、柳子弘でございます」といった。中から巖そかな声が飛び、

「お入りなさい」と短い言葉であった。彼は震える体をやっと起き上り、戸を開けて部屋に入ってしまった。部屋に飾ってある調度品も昔の儘であり、改まって眺める彼女の若さもその儘である。彼は坐

るのも遠慮がちにまごまごしていると、彼女は指図をしてそこに坐れという。彼が座につくと彼女は軽く頭を下げて、

「ようこそお出くださいました。わたしは今日この時をお待ち申し上げておりました」といった。「お入りなさい」といった時とは打って変って優しい声である。子弘は返事に困って黙っていると、

「わたしが今日この時をお待ち申したというのは外でもありません。わたしにはわたしの定めがあり、あなたにはあなたの誤解があつて、婚礼初夜にお別れしなければならなかつたのです。それを御理解して載さかつたのです」といつてから更に続けた。

「当夜あなたとわたしは今夜と同じく、幾分斜めに向會つて坐つていましたね、気恥かしさと未知に対する戦きでお互に無聊をかこつていましたが、あなたは尿意を催し外に出ようとなさいました。その時の状況を再演して見たら御諒解がつこうかと思いますが、如何なものでしょうか」と彼女はぐいぐいと押した。

「その位のことお安い御用です。それでお互に気が済むのならこれに過ぎた幸せはありません」と彼は自信をもつて答えた。

「それではお起ちになつて外へ出て見てください」と彼女は急込んだ。

子弘は彼女にいわれるまま起ち上り、戸を開けて片足を履物に突込み、二の足を履物にかけて歩こうとした時は、彼の周衣の裾を觸む者がある。その夜「どちらへお出ですか、便器なら部屋にあるものを」という声はきこえず、代りに彼女の甲高いヒステリックな声が「はいッ、それまで」と勝ち誇らしげにきこえてきた。彼は何の抵抗もできずにじっとしていると、

「後ろを振返つて見てください」と厳かにいった。彼は命ぜられる

して何処かへ逐電し、自分は頼り処もなくなり親戚のところに預かつて貰つて、離れ家をひと間当てがつて厄介者扱いされながら生きているうちに、子弘の父が亡くなつた年に病を得て死んだ、ということであつた。子弘は黙つてそれを聞いていたが、いまとなつてはどうすることもできないことであつた。暫く沈黙が続く、

「もう夜も更ける時刻です。ここはあなたの永く居る場所ではありません。早くお帰りください」といつてから、

「これでわたしの氣も晴れました。でも、わたしという女は、余程悪い星の下に生まれましたのね」とまたいつてから話を締括つた。

顔の愁いといい、沈み勝ちな話し振りといい、普通ならば泪の一つも流すところだが、彼女にはそれが無い。終始一貫して冷静沈着そのものである。彼女には流す泪さえ失せてしまったのかも知れなかつた。それは彼女が生きている人間でないことを証立立てることもあつた。子弘は後髪を引かれる思いで起ち上り、彼女にお別れを告げた。そして中門を通り大門を出た。相も変らず趙家らしく思える趙家は、彼が先刻通つた外庭や内庭や舎廊や燭籠や人々が、大門を出るまで見送つてくれるようでもあつた。

子弘が大門を出た時、彼は目眩に似た衝撃を受けた。真暗で物の分別がつかない。進むにも退くにもどうにもならなくなつた。彼は趙家の明りを求めて後を振返つたが、そこには大門も見えなければ趙家も見えない。ただ暗闇があるだけだつた。彼は進退きわまつて、これでは時間を持つより方法がないと考え、まよよとばかり地べたに坐り込んでしまつた。そこは草叢であつた。秋とはいへ幾分夜露に濡れているせいか湿つていた。だけど我慢するより仕方がない。蹲つて今夜の出来事を回想するうちにやや微睡んだ。夜氣は

ままた後を振返つた。

彼は完全に打ちのめされ、自分の明らかな錯覚であつたことが理解されたのである。それは自分の周衣の裾を掴んだのは誰でもなく、戸の把手が犯人であつた。彼女は依然として同じ場所に坐つて居り、周衣の裾に手が届く筈もない。

子弘はあたふたと部屋に入り、土下座の恰好で百拝して罪を詫言た。そして、俺は何と愚かな男であらうか、と心の底で思い、地方長官までやつた分別ある五十男が熱い涙を止めようもなく流した。初夜の晩、吾伊の謂つた言葉が想い出される。「一人一人を殺すようなことになりすよ」といつたことを。

「いま更悔んで見たつて仕様のないこと、わかつてくださればそれでよいのです。わたしはそのような運命を背負つて生れてきた女ですのよ」と優しくいつた。子弘は彼女を慰めようにも返す言葉がなくなつていた。

「わたしは、あなたが官職に就いたことも、結婚なさつて三人の御子息を儲け、幸せにお暮しのことも存じておりました」といつてから、「一時お怒めしくも思い、御出世の邪魔をし、幸福な家庭を破壊しようと考えたこともありましたが、わたしは悪い星の下に生れた自分の運命を悟り、それはできませんでした。わたしはあなたの最初の妻ですもの」彼女の声は沈んだ。折角お出くださつたのに、何ももてなしができない場所であることや、彼女の家が没落したことなど語つたが、それによれば、――

破婚されたから三年目に父母は相繼いで亡くなり、弟の貞植は結婚した当座はそうではなかつたが、日が経つにつれ放蕩を始め、何をどうしたのかあれだけの資産を蕩尽して終い、家屋敷まで人に渡

膚に凍みた。一番鶏が鳴き、何処か遠い所で二番鶏が鳴いた。刺すような寒氣に微睡から醒めて、目を開け空を見た。空はぼう々と明るくなつていて、東の方からやがて陽が上ることを示している。彼はむくくとき上り辺りを見渡した。立っている前には小さな土饅頭が盛り上つており、草は茫々と生え、幾本もの蓬の高い茎がよき、によきと立つて饅頭のお守りをしていた。未だ暗くて全体は見渡せないが、どうも共同墓地の感じがする。これが彼女の墓なのだろうか。あれやこれやと前夜を想い浮べ、確かに彼女の墓であることがわかるような氣がした。氣の毒にも死ぬ時も誰一人親身に見取られもせず、死んでからでも祖先の墓地にも葬られないかわいそうな女、この時この国の体制であつたとはいへ、余りにも矛盾多い制度だと考えざるを得なかつた。彼は感慨深そうに立ち去ろうともせず物思いに耽つた。共同墓地の不氣味さも何処かへ消し飛んで、永いことそこに佇んでいた。

東の空が明るんで、天地万物を照し始めた。そこは可成広い共同墓地で、丘の上にあつた。子弘は懐から小刀を出し草を一本一本丁寧に刈り取つた。刈り取つた草を堆高く墓の前に積み上げ目印とした。切り取つた蓬を一本だけ肩に掛けそこを立ち去つた。何処をどうして歩いたのかわからぬが、大分空腹も感じたので昨日立ち寄つた酒肆を訪ねたが、酒肆は跡形もなく消え失せている。ここもまた草だけが生い繁つていて、有りし日の面影も残つてはいなかつた。

子弘は寒氣を覚えて眼を醒ました。秋の日の午後の陽差しは大分傾いている。彼は縁側から部屋に入り、母家に声をかけ酒を少し持つて来いと命じた。冷えた体に暖をとるためである。

ああ、夢であつたのか。夢にしてはあまりにも確か過ぎる。或は本当かも知れない。若し本当だとしたらわしはどうすればよいのか。魯伊の言分ではないが、わしは自分の軽率な行いで人を殺したことになる。そうなるかわしは何という男だろう。いい氣になつて人々に學問を奨めたり、人倫道德を説いたりするがそれがどうしたというのだ。一人を助けるのは愚か、自分の妻となる人さえ殺したではないか。しかしまだ希望はある。万が一正夢であつて欲しくない。これは是が非でも確めねばならぬことだ。事実がそうであるならば、満腔の謝罪と充分なる償いをせねばなるまい。

その夜、夫人は彼から明日自分は旅に出ることを言い渡された。

- (1) 老学者の両班。
- (2) 両班に対する尊称。
- (3) 正二品以上の官職の人の敬称。
- (4) 四柱を書いた四星状。
- (5) 青紅の綵緞を使うが、小不過兩多不踰十と定められる。
- (6) 函布夫のことで函を担いできた人。
- (7) 交拝礼、魯拜礼を行う大礼のこと。
- (8) 新郎が新婦を自家へ連れ帰ること。
- (9) この時は相對者に尊敬する意味。

直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接購読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかかわりたくないためと、小さな誌面を大事にしたいためである。だから読者の購読料が『黒の手帖』の主要な収入源になる。読者が口伝で『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購読者となることをあえてお願いしたい。

購読料の払い込みは振替（東京一〇二四六五番）か現金封筒の利用が、一番確実安全である。切手で代用されてもよい。

◆『黒の手帖』取扱書店◆

東京Ⅱ文獻堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、模索舎、麦社、川崎Ⅱ甘露書房、仙台Ⅱ八重洲書房、名古屋Ⅱちぐさ正文館、十月書房、京都Ⅱ三月書房、京都書院、ふたば書房、大阪Ⅱ大阪ウニタ、曽根崎書房、神戸Ⅱイカロス書房、北九州Ⅱ未来書房、札幌Ⅱアテネ書房。